クリニックナース事業

～三浦市立病院小澤幸弘総病院長が取り組む、新しい人材確保の手法～

三浦半島の先端に位置する三浦市は、総人口 40,123 人（2024.1 月統計）。1994 年の 54,339 人をピークに減少が進んでいる地域です。高齢化率は 42.0%で、神奈川県の 25.9%、全国の 29.2%を大きく上回り、約 2.4 人に 1 人が高齢者という状況にあります。

そんな三浦市で、地域医療に尽力されている三浦市立病院の小澤総病院長に「クリニックナース事業」についてのお話を伺いました。

Q：クリニックナース事業の概要を教えてください。

地域のクリニック、病院、施設で働く看護師同士が、スキルアップや地域での看護師連携を強化する取組みのことです。

神奈川県医師会の事業として、令和元年から始まったもので、医師会としてもクリニックの看護師さん達がなかなか集まらない。クリニックや施設の看護師さん達が孤立していて、スキルアップをする機会もなかなか無いということで、何か役に立つ事業を作れないかということからの発案でした。卒後教育といいますか、就職してからの教育みたいなものを地区でやって行こうと、医師会や病院が中心になって行う形に対して、医師会が補助を出すということになり、最初に手を挙げたのが三浦と藤沢の郡市医師会でした。

藤沢も三浦も 6 年以上ずっとやり続けています。その間に取り組みが浸透してきて、県内に 5 地区ぐらい作ろうということになって、昨年は藤沢、三浦、横浜、相模原の 4 地区で実施しています。各地区に広がってきているので、地域で看護師さん達を育てるような形ができているのかなと思います。

Q：具体的にどのようなことを行っているのですか。

三浦の場合は、『みうらナース・ツナぐ・プロジェクト』と題して、毎年、講習会であるとか、ワーキングなどを、当院の看護科がいろいろと企画して、クリニックや施設の看護師さん達に声をかけ、一緒になってやっています。最初は交流ゲームのような企画で、お互いに知り合うことから始めて、その後は、ちょうどコロナも始まって入ってきた頃だったので、コロナに関して病院が行っていることの情報提供や勉強会をやりました。

◆『みうらナース・ツナぐ・プロジェクト』のテーマ・内容◆

2019 年 「安心して過ごせる三浦市にするために」（講話と交流会）
2020 年 第 1 回「三浦市における新型コロナウイルス感染症対応の実際と課題」（研修）
第 2 回「災害看護勉強会」（研修）
2021 年 「三浦市における新型コロナウイルス感染症の実態」（研修）
2022 年 第 1 回「新型コロナウイルス感染　院内の現状・対策」、
「保健所の役割・現状と今後の課題（研修）
第 2 回「あなたの想いをつなぐ（ACP）」（研修）

2023 年 「つないで支える認知症」（認知症サポーター養成講座）
2024 年 「人らしさ・その人らしさ”を大事にする看護とは～意思決定支援に焦点をあてて～」（研修）

Q：これまでの取り組みをどう評価していますか。

地域において、病院に勤めている看護師さん達と、クリニックの看護師さん達の顔の見える関係が自ずとできてくるので、そういう面でも意義があると感じています。医師会としてもその辺の意義を認めていて、積極的にこの事業を進めています。だから、今までこれだけ継続して繋がってきて、広がりを見せているのです。

クリニックに勤務している看護師の皆さんは、病院に比べて人数が少ないですから、これに参加することによって孤立感みたいなものが払拭されています。三浦の場合は、お互い一緒になって作業するみたいなことをやっていますので、本当に顔の見える関係ができてきています。それぞれの地域のやり方があってもいいと思いますが、これを一つの手段として、地域の看護師さん達が繋がっていけば、離職も少なくなるのではないかと思っています。

Q：クリニックや施設の側からの評価はどうですか。

評価は高いと思います。三浦の場合、病院としては積極的にクリニックなどと関係をもってやっていかないと、生きて行けないという思いでやっていますが、それよりもクリニックの看護師さん達の方が、病院の看護師さん達と接点を持ってスキルアップもできて、お互い顔の見える関係もできるということで、クリニックの先生方は、非常に積極的に参加を続けているのではないかと思います。

Q：医師会が経費支援をしてでも看護のことに事業を起こすというのは、どういう理由でしょうか。

県医師会としても、いかに看護師の離職を少なくするかとか、どうしたら神奈川県に就職・定着してもらえるのかという方策を求めているのですが、決め手がないのです。地域の中で医療施設も看護師もお互いに仕事がしやすくなるということは、逆に言うと定着して離職が少なくなるということにもつながり、有効な方法かなと思っています。それこそ、その先には潜在ナースを知る機能にもなる。

しばらく仕事から離れていて不安だとか、どういう勤務先かも分からない、知り合いがいないとか、生活のことも含め復帰するハードルが高いのですが、この事業に参加することによって、地域の実際にクリニックや病院に勤めている看護師さん達と知り合いになれるというのが大きいなと思っています。この会で得られる情報だけでなく、情報の輪が広がり、「生活で空いた時間だけ働きたいのだけど、そういう働き方はあるかしら?」みたいなやり取りをして、「非常勤ならスポットで働けるよ！」みたいな。要は、民間の業者が色々とやる以上に地域の看護師さんたちが、自分たちの情報網を使って、自分たちに一番身近で働き方に合ったところに再就職先を探せる手段にもなりうると思っています。

もう６年以上この事業をやっていますから、口コミで地域の看護師資格を持った人たちにも声をかけて参加してもらい、その輪を広げていくというようにしていければ、かなり有資格者の人の再就職、職場復帰というのが促進でき、地域に看護師さんたちが根付いていくのではないかと思っています。各地域でこういうことをやっていければ、いい条件を求めて遠くを探すよりも身近で探せます。やはり身近なところに自分の合った勤め先があるということが、一度離職した人たちにとっては一番のポイントではないかなと思います。

Q：今後に向けた思いをお聞かせください。

この事業が全県的に広がればいいなと思っています。医師会の事業だけに止まるのはもったいないと思っていて、県の事業として、看護人材の少ないところを支える手段としては非常に有効な方法じゃないかということを神奈川県の人材課にも話をしています。「かながわ地域看護師」というのも地域で看護人材を育てる仕組みを大事にする発想から作り上げたのですから、看護業務のあり方というようなところで、自分に合った所に勤めるというのが、それぞれにとって幸せですし、一番合理的かなと思います。

医療人材を地域で確保して行くという形をずっと作っていけばいいのかなと思っています。

……

小澤幸弘総病院長

1981 年新潟大学医学部卒業。横浜市立大学附属病院で初期研修後、同大学医学部第一外科に入局、その後神奈川県内病院を中心に消化器がんの治療に従事。神奈川県立がんセンターでは食道がんを専門とし、多数の症例を経験。1994 年から横浜市市立大学医学部救命救急センターで救急医学教室講師を務め、1996 年に三浦市立病院外科医長に就任。以降、同病院の診療部長、副院長、病院長を歴任し、2010 年より総病院長として現在に至る。

取材日：2025 年 9 月 26 日
聞き手：神奈川県看護協会会長　本舘教子